

c 図2中の-----はせきの地図記号で、砂防ダムを表している。比較的新しい火山噴出物が堆積する火山の斜面では、降水があると火山泥流、土石流が発生しやすい。押し出された土砂は谷を流下し、傾斜が緩やかになったところで氾濫を起こすことがあるので、砂防ダムや土砂を誘導する擁壁などがつくられている。→正

よって正しい組合せは⑥である。

問3 33 ①

■ステップ1

まず、図5から、E・F地域の地形の特徴を確認する。治水地形分類図は2万5000分の1地形図が基になっている。凡例があるので地形の判定は容易にできる。Eは低地で、氾濫原を流れる蛇行河川と三日月状の旧河道が読み取れる。Fは河川の両岸で地形が異なり、図の東側である左岸は比較的平坦だが、西側である右岸は台地・段丘が卓越する地形で、いくつもの谷によって開析されていることがわかる。

■ステップ2

地図から得た情報を基に、それぞれの地形の成り立ちを考えながら、下線部e～gの被害予測の正誤を判断していこう。

e Eからは旧河道がいくつも読み取れる。→正

f Aは旧河道であり周囲の土地よりも低湿な地域で、氾濫の際は水が流れ込みやすく、排水にも時間がかかると考えられる。→正

g イは台地・段丘と低地の接点にあたる。その境目は崖になっていることが多く、豪雨の際には崖崩れが起こる可能性がある。→正

よって、正しい組合せは①である。

問4 34 ①

■ステップ1

図6において、カは山地を中心に被害予想地域が広がっている。キは、山地と平地の間の斜面に広がっており、クは狭い範囲でかつ等高線の幅が狭くなっているところに分布していることを読み取る。

また、災害の現象は、それぞれ、Kが土石流、Lが地滑り、Mが急斜面の崩落についての説明である。

■ステップ2

台風等でまとまった雨が降ると起きやすい土石流の被害は山地から谷に沿って起きるので、山地に被害予想が広がるカが該当する。地滑りは、地質にもよるが、長年の地下水の動きなどが誘因となって引き起こされるため、地下水位が地表面近くに上がってくる山地の裾野に被害の予想が広がると考えられキが該当する。最後の急斜面の崩落であるが、急斜面とは斜度30°以上と定義される。等高線の幅が狭くなっている箇所は、勾配が急なところであるから、クが該当する。よって、①の組合せが正しい。

問5 35 ①

① 誤文。夜須駅からあかおか駅へ向けて出発するということは、地形図の海沿いを右から左へ移動する。すると、進行方向の右側に山が、左側に海が見える。

② 正文。砂浜の地図記号は、である。また、地形図は、北が上に

資料読解

因果関係の考察

資料読解

なるので、海は南側に広がり、正午（＝南中）には、海側から日を受ける。

③ 正文。港や河口の防波堤は、南西側に張り出して設置されている。このことから、南西からの波が強いことがわかる。

④ 正文。赤岡町の文字の横には、高等学校（⊗）の地図記号が読み取れる。その南にある（★）は小・中学校の記号である。なお、実際にここにあるのは、中学校である。

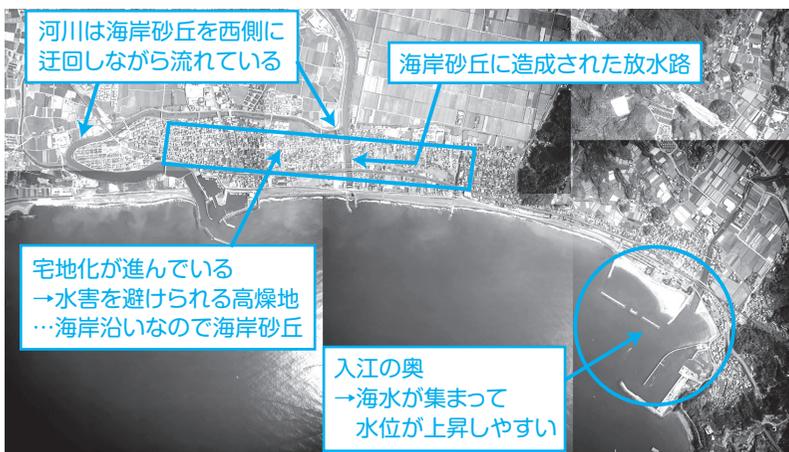
問6 36 ②

■ステップ1

津波の浸水深には、土地の海拔高度が反映される。よって「浸水深10m以上」と想定される区域は標高の低い沿岸地域に分布すると考えられ、サが該当する。防波堤が整備された港湾が見られる東部で「浸水深10m以上」の想定区域がやや広いのは、入江に面しているためである。津波や高潮は水面が狭くなるにつれて水位が一層上昇するため、入江・湾の奥で被害が拡大する傾向がある。

■ステップ2

一方、内陸地域では標高が高くなるにつれて浸水深が浅くなると考えられる。シとスと比較すると、浸水想定区域が内陸地域に広く分布するスに対して、シは海岸から離れた北西部や東部の山沿いのほか、海岸に沿った带状地域に設定されている。そこで図7の写真を確認すると、農地が広がる北部に対して、海岸に沿った带状地域では宅地化が進展している様子や、南流する河川が一带を西側に迂回しながら海に注いでいる様子が読み取れる。よって、この带状地域には、より高燥な海岸砂丘が分布していると考えられる。以上より、シを「浸水深5m未満」、スを「浸水深5～10m」と判断する。



この問題の攻略ポイント！

地形図問題では、等高線の疎密や谷線・尾根線などから、地形を立体的に捉える練習をしよう。比較的低い土地は水田、高燥地は集落や畑などの土地利用からも土地の高低を読み取ることができる。数多くの地形図を読むことで見る目が養えるので、多くの問題に取り組みたい。

資料読解

因果関係の考察